

『聖書と歎異抄』

2017年05月06日

作家の五木寛之氏と神父の本田哲郎氏が『聖書と歎異抄』と題する対談を4月に出版している。東京書籍の小島岳彦氏の呼びかけで対談が実現したそうである。興味深い取り合わせと思い、読んでみて、色々なことを考えさせられた。

本田神父は大阪市の釜ヶ崎で、日雇い労働や公園、路上で野宿生活をしている人々の支援をしながら、聖書の勉強を深める、司牧をしておられる。ヴァチカンで聖書を学び、東京で聖書学を神学生に教える、カトリック教会のエリートであった。ところが、釜ヶ崎で野宿生活者と出会い、聖書の読み方が一変し、イエスの生き方と言葉が心に突き刺さって来た。紀元4世紀、キリスト教が国家の承認を受けた時から、教会は上から目線で、教諭すようになり、福音の真実を失った。歴史の中で、加害者の立場に立ったことも少なくない。マルコ福音書1章15節の「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」という言葉が、宣教活動の第一声とされている。悔い改めはギリシア語では「メタノイア」という言葉であるが、真摯な自己反省などではなく、「視座の転換」を意味する。抑圧され、小さくさせられている社会の底辺にある人々の視座に立つことによって、見えなかったことが視野に入ってくる。人の痛みを共感し、自分と人、自分と社会の関りを見つめ直す。ここに、自己変革への可能性が開かれる。キリスト教は「愛の宗教」と言われ、「互いに愛し合いなさい」「敵をも愛しなさい」という言葉に要約されている。「愛する」とは努力の問題ではなく、出会いの問題であり、愛せる人がいて、愛せないその他大勢の人がいる。敵は愛せない、しかし、それでも、大事にしなさいと言われれば納得がいく。それらをまとめて「愛しなさい」と言われると、誠実な人を苦しめ、キリスト教を理想主義、建前の宗教にしてきた弊害がある。五木氏は本田神父の聖書の読み方に感銘を受けたと、下記のように書いている。「顔をあげて天をみあげる前向きな姿勢とともに、地にうなだれて涙する悲嘆もある。私が本田さんのことばに心を揺さぶられるのは、そんな弱い人間を底辺から起き上がらせようとする静かな決意に触れたからだった。」

五木氏は、今や仏教の伝道者のようである。仏教に関してはもとより、キリスト教に関しても広い知識を持っておられる。五木氏は敗戦後、朝鮮から引揚げる途中、生きるため大人たちの醜悪な姿を見た。戦中、戦後の体験を語れない人々がいるが、生き延びた背景には「善き者は逝く」という犠牲の事実があったからではないか。日本に帰って来られた人は「悪人」で、自分も生きていいのかという後ろめたさがあったが、親鸞の考え方とことばを聞いて、生きていいんだという、赦されているという感じがしたと言う。

本の巻末に、『歎異抄』の五木氏の私訳が載っている。『歎異抄』はいつ読んでも、安らぎを与えられる。親鸞は自分自身の存在に、深い絶望を持った人である。それを、五木氏は次のように語っている。「ええ。仮に貧しき者、弱者であったとしても、この地上に生きているということは、他の生物とかいろいろなもの、命をいただくことでしか生きられないことからして、弱肉強食の中で生き延びているわけだから。まあ原罪みたいなものです。『歎異抄』では『宿業』ということばがあります。生きていることがすでに『業』である、という。」生存にまつわる「罪」を知って、念仏による浄土（是認）という救済の道を説いたのである。親鸞の1,200年前、パウロはガラテヤ書2章16節で「ただイエス・キリストへの信仰によって義と（是認）されると知って、わたしたちもキリスト・イエスを信じました」と書いている。この信仰が私の救いである。